

スイスの国柄について思うこと

ギンジツク恭子

はじめまして。ご縁をいただき「展景」にスイスからお便りをお届けすることになりました。よろしく願っています。

ここスイスに暮らし始めてから、この3月で早38年になります。日本との距離はおよそ1万キロ。当時は、直航便と言えばスイス航空のみで、南回りで一日掛かりの旅でした。日本航空は、アンカレッジ経由でヨーロッパの主要都市まで運行していても、チューリッヒまでの便はありませんでした。日本からスイスに来るためには、一度ヨーロッパのどこかで乗り換えなければならなかったのです。数年後に、ローマ便とパリ便に組み合わせ、日本航空がチューリッヒ空港に立ち寄るようになったと記憶しています。あの頃はもちろんインターネットなどあるはずもなく、一旦海外に出てしまえば、日本語と日本の情報とは切り離された生活になりました。また、今こそ、一般のスイス人にも日本と日本文化が広く知られてきていますが、当時は、私は遠い極東の国から来



グラールス州 Tödi 山の眺め

たバリバリの異邦人だったことでしょう。そんなことで、今振り返れば、スイスを本当に第二の故郷と感じるまでには、山あり谷ありだったなあと思います。ちょうど、こちらで暮らし始めてからの年月は、世界的にも冷戦構造が終わり、新しくグローバリズムの問題が始まった時期にも重なります。日本の変化も、外にいるからこそ見えるところもありました。追々にそんな事柄にも触れることになると思いますが、まずは、今回は、私から見たスイスの国柄についてお話ししてみたいと思います。

数年前に、たまたまスイスの建国記念日の式典にお招きいただき、スイスの国柄についてじっくり考えてみる機会がありました。1291年8月1日、スイス中部の3州が四つの森の湖（通称ルツェルン湖）のほとりにあるリュトリの丘に集まって、ハプスブルク家の支配から独立するために同盟の誓いを交わしまし

た。これがスイス連邦の始まりで、8月1日はスイス人にとっては大事な建国記念の日です。毎年、その日はスイス各地で式典や大小さまざまなイベントが催され、皆で楽しくお祝いします。私がお伺いになった式典は、大統領臨席のもとリュトリの丘で開かれたもの。毎年テーマがあるように、*Gastfreundlichkeit*（歓待、おもてなし）がその年のテーマでした。式典の主催者が招いた来賓は、大統領とルツェルン地域の観光協会の会長で、それぞれがテーマにふさわしいゲストをスピーチの舞台に伴うということだったようです。ある日、私が副会長をしている瑞日協会にその会長さんから連絡がありました。瑞日協会は、日本に関心を寄せるスイス人が会員の大半を占める文化交流団体です。人々に広く日本とその文化を紹介する目的を持って活動しています。その連絡というのは、「今度の独立記念式典に来賓として出席するのだが、ちょうどこの春に日本を訪問して、日本のおもてなしの心に感銘を受けた。ひいては、日本の方を自分のゲストにお招きしたい、できれば日本人女性に着物を来て列席していただきたい」との依頼でした。そういうことなら、日本のアピールになることでもあるし、と事務局長にも勧められて伺うことになりました。

ところが、その数日前、急にその会長さんからメールがあつて、「実は司会者から、スイスが他のお手本になれるようなことは何かと質問を受けた、それは外国人として外からの視点を持つあなたに答えてもらったほうがいいと思う、ついでに、質問を受けた時にあなたにマイクを渡すから、話してもらいたい」とのことでした。ええー、そんなお話ではなかったはずー、とも思いまし

たが、もう日が迫っています。腹を括って考えてみることにしました。なにしろ、大統領をはじめ各州の代表や各国の大使も居並ぶ式典ですから、チヨコレート、時計、アルプス、ハイジで済ませるわけにもいかず、ある意味、長年暮らしているスイスについて、改めて向き合ってみるいい機会をいただいたのかもしれない。考えた上で、四つの柱を立ててみました。その時の要点をもとに、もう一度振り返ってみたいと思います。

一つは、スイスの民主主義精神。スイスは連邦制で、26のKanton（州）から成り、それぞれの州には州政府と議会があります。公用語は、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の四つで、ドイツ語圏が60パーセントを占めますが、たくさんのスイスドイツ語方言があつて、小さい国ながらも、その多様性と自立精神には独特なものがあります。連邦政府は、外交や防衛、それと内政の大枠を担います。主要政党から選出された7人の大臣で構成され、その中から1年ずつ持ち回りで大統領が選ばれます。言ってみれば、政府内には与党も野党もありません。充分協議して決定する、これはスイスが他国に誇つていい姿勢だと思えます。また、直接民主制なので、国民投票が頻繁にあります。政府からの詳細な冊子配布はもちろんのこと、その前には必ずテレビでも新聞でも、その案件を取り上げて詳しい説明がされます。大臣たちも識者との討論番組に出演して、オープンに議論しますし、司会者もかなり突っ込みを入れます。また、国民の誰でも10万筆集めれば、その案件を国民投票に凶る機会があるので、政治参加への実感が持てるものだと思います。

す。概してスイス人には、政治は自分たちの生活と直結しているという意識が浸透しているようです。大事な国民投票の前には、家庭でも個人の集まりでも、この件についてどう思う？といった話がよく出ます。たとえば、この3月初めに重要な案件についての国民投票があるのですが、今日もウォーキングの友人と話したばかり。そして、これは何よりもお手本にしたいところですが、最終的には多数決で決まっても、少数意見も無視しないという姿勢があることです。よく、それはスイスが小さい国だからできること、と言われたりしますが、基本的な民主主義の精神がスイスに深く根付いているということに、日本から来た私は強い印象を受けました。いずれにしても、民主主義には自立した個人の自覚と責任の意識が大事なのだなあとということを学ばされます。今回のスイスのコロナ対策でも、民主主義の精神をギリギリまで生かそうとしているように感じられますが、これからどうなるか注目です。

次に、ボランティア精神。スイスには Verein がたくさんあります。これは、協会とか団体とかクラブとか訳するのが適当でしょうか。私の関わっている文化団体もその一つですが、文化からスポーツと多岐にわたり、その大きさも様々です。共通の関心や目的を持った人たちが集まって会を作り活動しています。運営を担っている役員は、手弁当で一切の報酬はありません。私の住む町にもそういう会がたくさんあって、町で何か行事がある時には総出で手伝いますが、ボランティアの社会貢献です。ある意味、この Verein がスイスの社会生活を支える一つとなっていると言えるかもしれません。

三つ目は、寄付の精神。スイス人は質実剛健だと言われます。よく言えば、無駄遣いはしない、悪く言えばちよつとお金に細かい(?! )けれども、自分が助きたい団体に定期的に寄付する人が少なからずいます。また、いざという時には、快く寄付をする人が多いように思います。特に、どこかで災害が起こった時には、テレビなどで寄付の振込先が紹介されて、いつもかなりの額が集まるようです。個人的な体験での実感もあります。2011年の日本の東北大地震の時のこと。私たちの協会もいち早く、東北に義援金を送るためにチャリティーコンサートを開催しました。その時に一晩で集まった額の大きさには、本当にものすごく驚いたものです。

最後に、町や村や自然の景観を守る努力。たとえば、チューリッヒには、リマット川を挟んで旧市街が広がっていますが、中世の街並みが当時のまま残っています。外側はそのままに、内部はもちろん改装されて現在も暮らしが息づいているチューリッヒの旧市街。そんな石畳の路地を散歩するのが好きです。スイスで一番大きい街チューリッヒだけではなくて、スイスの其処(そこ)で美観を守るための厳しい建築の基準が設けられています。美しい自分たちの国を守り伝えていこうという姿勢を感じました。

あの時の司会の方は、「いろいろ褒めていただき恐縮ですが、今日は建国記念の日なので、素直に喜んで受け取りたいと思います」というようなことを言われました。私も長い間この国で暮らし

ていますから、もちろん陰の部分も経験してきました。どんな国にも光と陰の部分があります。故郷の日本もそうです。けれども、生まれ育った日本、縁あって第二の故郷となったスイス、この両方の人々の文化と社会を大事に思っています。